和服寸法設定の推移について（第1報）

高　月　智志子

On the change of the establishment of measurement of the Japanese clothes (1)

Chishiko TAKATSUKI

In this paper the author has made a study on the historical change of measurement of Japanese until the earlier period of Showa. It goes without saying that there is a long history in the measurement of Japanese clothes. However, in order to make Japanese clothes easier to wear, the author has discovered in this study that for the purpose of the eastablishment of measurement, scientific measurement of bodily figures has to be conducted, and also various factors at the time of wearing has to be taken into consideration.

序

和服の形態は江戸時代に完成されたといわれているが，塩原千代子は，「塩原式裁縫書」[40]（1923年）の中で「和服の直線裁ちは，服装経済上より頗る巧妙に工夫せられたるものなり，かく悉く直線，而も布巾のままなるものを曲線の総合体なる人体に，便利に纏ひ得らるのみならず，而も服装美の上より実に審美的のものなる点に於て，讃歎措く能はざるなり，斯く和服が今日の如く発達なすまでには幾変遷，その内種々なる自然淘汰を経て，今日に及びしこと勿論なるべしと雖も，そも我が国の気候・風土に適合したる此の和服の考案者は，抑々何人なりしか，甚だ平凡の如くにして実に達成したる偉大なる大発明家なることに敬服せざるを得ず」[40]と惜しみなき讃辞を述べている。

しかし，また，採寸については，「此の偉大なる和服考案者その人に於ては，何故に衽を斜線にして，その巾を4寸になし，袖口を何故に7寸に定めしか，凡て衣服要部の割出寸法に就ては，各相当なる，拠るべき基準のありしものと信ず，然るに近世衣服は単に，普通寸法何寸と，一定の目安を定め，体格に従ひ任意増減すと雖も，その増減に一定の基準あらざるを以て，その身に適当なる寸法を得ること，甚だ困難なり，仮令へば，腹部の尨大なる人，猫背の人，鳩胸の人等で人各々その人毎に長さ，太さを異にし，概ね可ならんと忖度したる寸法も，時に長きに過ぎ，又短きに失す。これを再三するも尚正鵠を得ざること多く，遂に満足を得ずして之を忍ぶこと往々あり」[40]となげいている。

このように，塩原の指摘をまつまでもなく，和服の製作は，人それぞれ体型が一様でなく，またその着装も，個々の感覚，時の流行等によって，異るものであれば，やはり，その個人の体型に即した寸法により，製作されたものでなければならない。また，同一体型でも，着装の仕方によっては，おのずと寸法も異るものと考えられる。どのような体型，どのような着装であっても，着やすい着物を製作するためには，まず，個人の体型を正しく把握し，採寸することが重要な条件である。そこで，本研究は，現在の和服寸法設定はどのような経緯を経て発展し，今日に至ったのか，

その推移を調べ，問題点を明らかにしていく。

〔1.0〕 布による寸法設定

上原素白が「裁縫早手引」[2] (1830年) の中で，「今絹布の巾尺，新渡古渡の相違ありて，先事既仕不合時によって云云」[2] と述べているように，この時代の和服製作の方法は，布巾を基準にして設定していたことが推察できる。

また，この方法は，「裁物早指南」—著者不詳—(1850年)[3] および「裁物早学問」—著者不詳—(1851年)[4] で「反ものの丈2丈7尺8寸ある時は，2丈7尺5寸のつもりにて裁つべし，必ず其丈一配に裁つべからず」と述べていることからもあきらかである。

この方法は，きわめて原始的であって，牛込ちゑは「被服教育の変遷と発達」(1971年) 102の中で，西郷葆が「裁ぬひおしへ草」(1875年) の裁ち方で，棒衽裁ちの図に，縫い込みを鉤衽の形に切ってしまってもよいと記述してあるのは，江戸時代の裁ち方の名残りで，この時代の木綿の衣料は，今から想像もつかないほど丈夫で，自然厚地で堅かったから，着やすくするために，また縫いやすくするために裁ち落してもよいとしたものであろう」と述べている。

これらの著書は，その殆んどが，裁ち方に終始し，実に数多くの裁ち方図が記されているが，その出来上り寸法については，殆んどあきらかにされていない。すなわち，図1.2のように，裁ち方図の中に，布巾，身たけ，袖だけ，衿丈，半衿（現在の共衿のこと）等が，何程の寸法であるならば，どのような裁ち方ができて，入尺は何丈というように，布あっての寸法で，着る人の体格に合わせられるかどうかは，甚だ疑問である。

図1. 絹布裁要

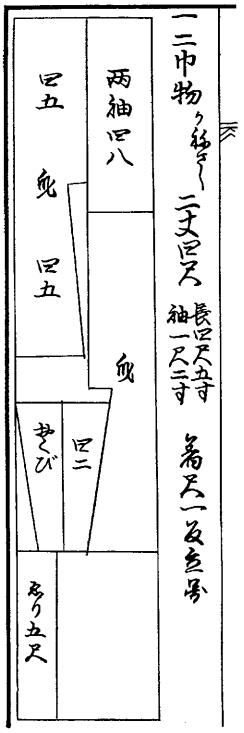
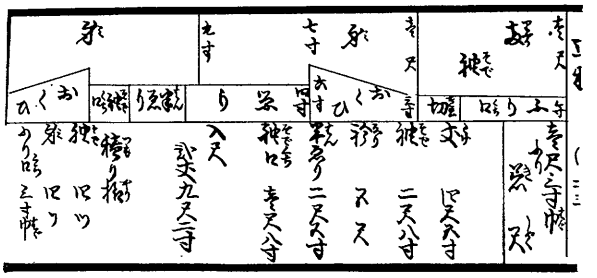


図2. 裁物早指南



ところが，このような手法は明治，大正時代にも散見できる。たとえば，久保田梁山は「女学生徒裁縫教授書」[103] (1878年) の中でその裁ち方を，「先づ，袖をたち，残りを五つ七分に折りて，四つ分をとり，身ごろとなし，残り一つ七分を竪二つざきにして，衽衿となすなり，但し棒おくびにたたんと思はば，衿下にはぎて棒に裁つべし，又衿先へはぎて衿をとふし置くも宜しきなり」と述べ，また，篠田監子は「裁縫おしへ草」(1916年) の中で，用布の長短あり」，用布に長短あれば，袖身頃，衿，衽何れも寸尺に相違あり」[31] と述べている。さらに篠田は，その例として，

用布2丈8尺ならば，袖丈1尺6寸，身丈4尺，衽丈3尺5寸，衿下2尺1寸

用布2丈7尺6寸ならば，袖丈1尺5寸，身丈も衽丈も同様にて，衿下は2尺なり。

用布2丈6尺6寸ならば，袖丈，褄下（衿下のこと）異ならざれども，身丈3尺8寸，衽丈3尺4寸にしてよし[81]。

と記している。また，吉田調子は，日用百科全書，第七編，「裁縫と編物」[89]（1922年）の仕立上げ寸法の項で，「丈は定尺なし，只裁ちし丈に従ひて，縫ふべし」と述べている。

すなわち，江戸時代で主流をなしていた。布巾，布丈による寸法設定の方法は，明治を経て大正後期に至るまで用いられていたことが推察できる。

〔2.0〕 着装による寸法設定

いっぽう，明治の初期頃に，着装により，寸法を定めていく流れがみられる。

飯島偉考は，「明治初期における服装技術史上の和服と洋服裁断技術の接点」[101]の中で，「へら付と呼ぶ和服独得の裁断システムは，当時の職人社会では秘伝であり，口伝として文献に記録されずに進歩して来た」[101]と述べている。このことから，当時は身に合った衣服を整えるということは，至難の技であったということがうかがえる。

一般には，その多くが裁縫上手と云われる師匠や祖母，または，母から娘へと受け継がれ，また伊藤が指摘しているように，和服製作のための寸法は，人体美に立脚して，リアルに身に纏う工夫を重ねながら進歩してきた。とくに着装の観点から寸法を決めるといった方法は，明治に入って高橋貴四郎がいる。

彼は，その著「新編裁縫学全書」[104]の中で，「長着衣服の造り法の要領は，元来，衣服の美を現すには着方にあると云ふが，その着方を相助けるには，造り方に依るのであるから，此の点に就いて，充分注意をしなければならない。彼の都会の婦人の衣服の様と，地方の婦人の衣服の様とを比較すると，都会の婦人の姿は著しくスラリットして居る様に見えますが，何も都会の婦人だからとて，骨骼の上に異りのあるべき訳でなく，要するに，衣服の造り方の如何に因って岐れる所であります。然らば，其の様のよき作り方とは，如何なるものであるか，と申しますれば，先づ，衣服全体の寸法の割合の比例が取れて居るか否かに外ならぬのであります。されば，其の適当なりと思料する寸法の割合をつぎに掲げませう」と記し，さらに，その具体的方法として，つぎの4点について詳述している。

其の1. 袖幅を広くして，肩幅を狭く，亦た，身幅が地方のに比較して，割合狭くしてあるが故，肩が頗る小さく見えて，腰と裾がキチンと締り，全体の格好が甚だしく優美に見ゆるのであります。

其の2. 袖附が多いと，胴が大きく見えるを以て，是れを避けんが為め，都会の婦人は身八ツ口を極端に初り上げて（袖附を少しにすることです）袖と身頃との別を鮮明にし，以て，胸，腹の辺りを筋細に見せて居る。而して，袖附を前より後を尠くしてありますが，是は帯を高く締めんが為なり。

其の3. 袖口を成るべく広く開け，又，袖丈を成る可く長くするのでありまして，袖口を広くして置く時は，手を垂れた時に，袖口先が稍々後の方に折れ返り，同時に長い袖が，後の方にはねて乳房の辺りの袖を延し，それが為め，胸部の辺は，随分細くなるのであるが，若し，是れと反対に袖口を狭くして，袖丈を短かくせば，手を垂れた時は，袖口先きは後の方に折れずして，左右に突き出し，又，短い袖では後の方へは，はねずして反って脇の下

に挾まり，胸部の皺も延びずして，反って胴は非常に大きく見える様になるのです。

其の4. 身幅であるが，此の身幅もあまり広くすれば，帯を締た時，腰のあたりに皺が沢山出来て見苦しきものであるから，東京の婦人はよく，七五三の衣服を着ますがあれはあまり狭ますぎるかのやう思われます。先ず，着て格好の好き身幅と申しましては，女物では，後7寸5分，前6寸，袖幅4寸位ゐが適当であります」と述べている°[104]

この高橋の手法は，今日着物を着てみて，より美しく見えるように，その寸法を加減するといった，標準寸法により加減し，寸法設定をはかる方法の源流をなすものといえる。

また，高橋と同じ流れをくむものに，尾崎芳太郎[47]，及び神谷ユキヘ[80]の手法がある。

尾崎は「新しい和服の裁縫」(1925年）の中で，身丈について，「布地のあり丈で仕立て上げる事が，普通仕立として一般の風習になってゐるやうであるが，これは却っておかしな事で，仮りに3尺3寸の丈の人が，4尺も或はそれ以上も丈のある着物を着て，それで恰好をよくしやうと思うと，随分骨が折れて，それで思ふやうに行かないから，自分の着丈よりも5寸か6寸長ければ十分である。おからげも一つの装飾の積りで居ればよろしい」[47]と述べている。また神谷は，「家事・裁縫・手芸講座」(1931年）で「凡て衣服の仕立上げ寸法は，整容上に非常に関係するものである」[80]と述べ，その寸法の定め方についてつぎのように詳細に記している。

1. 袖

イ，袖丈は，大人物は年令によって定めるよりは，その人の身長によって定める方が恰好がよいのである。例へば，背の高い人が，袖丈を短かくして，袖附を少なくする時は，下半身が益々長く見えるものであり，又背の低い人が幾ら若いからといっても，留袖である以上は前と反対に，益々脚が短かく見えるもので恰好が悪い。

ロ，袖口明は，腕の太さに依るのである。即ち肉づきのよい人は普通より少し大きく，又余りに細い人は少し詰めるやうにすると，その欠点を多少は補ふことが出来るものである。

ハ，袖附，帯の位置と，腕の太さに依って定めるのである。帯を高くしめる人は袖附を少なく，腕の太い人は少し多くするのである。尚袖附寸法は前より後を2糎位少くして置くとよい。

ニ，袖幅は，肩幅より少し広い方が恰好がよい。

2. 身　　頃

イ，身丈は，着丈よりも20糎位長くして置くとよい。余り長過ぎるとお端折の恰好が悪くなる。

ロ，身幅は，身頃の裾口の総幅は，腰の一番太い所の周囲は，前の打合せとして，腰骨から腰骨迄の寸法を加へたものである。

ハ，衿肩明，衿肩明の広いのは下品に見えるものであるから，少し詰加減にする方がよい。尚撫肩の人も詰加減にし，いかり肩の人は広く明けるとよい。

ニ，繰越は，衿脚に衿がつかず，離れず，自然に衣紋がつくろはれる為に，普通は，1糎半位にして，三ツ衿の縫代を2糎にするとよい，尚老人及び半屈み（猫背）の人は繰越をつけないで，三ツ衿の縫代を2糎半位にするとよい。又首の短い（猪首）の人は，繰越を普通より多くした方がよく，中肉で2糎乃至2糎半，肥り肉で3糎半位でよい。[80]

このように，着装によって，よりよく，その体型に合う寸法を求めようとした。この手法は，長い年月を経て積重ねられてきた。そして，もっとも多くの人に用いられた寸法を，一般に普通寸法として用いられるようになり，これを基に，個人の体型に合せようとした方法へと発展していく。

〔3.0〕 普通寸法による寸法設定

前述のように，一般には，裁縫は口伝により伝承されてきたため，仕立上げ寸法については，伊藤の指摘するように，文献に記録されずに来たが，明治に入り，学校教育の中で裁縫が採り上げられるようになってからは，仕立上げ寸法が，裁縫書の中に見られるようになった。

そのもっとも初期のものが，近藤寿和の「裁縫指掌上之巻」[7]（1879年）の中に見られる。この著書以後のものには仕立上げ寸法が記載される様になった。中尾宗七は，その著「普通裁縫書上」[9]（1883）の通常衣服の寸法の中で「普通重立たる寸尺を記すのみ，其他を銘々の適宜にすべし」[9]と述べている。これが，後の標準寸法に発展していくものであるが，当時の普通寸法は，従来の経験により，積重ねて来た寸法を，普通寸法として用いたもので，後のもののように解剖学的根拠はなかったものといえる。

同じ流れをくむものに，錦織竹香および，岩瀬松子がいる。錦織は，「増訂普通裁縫教科書」[13]（1902年）の中で「衣服各部の寸尺は，男女，老若，肥痩，長短，時の流行等に依りて各異なるものなれども，大凡そ，寸尺概定覧表を標準として，其の人々に適したる寸尺に定むべし」[13]と述べ，岩瀬は，「和服裁縫道しるべ下巻」（1904）で，その寸法について「普通大略を示す」[13]と述べている。

この手法は，普通寸法を一定の目安として，その寸法を増減することにより，個人の体型に合せようとしたもので，これは現在も用いられている方法である。

大正時代に入り，同じ手法の人達に吉田房子[33]，田村てう[54]，小岩井規太郎・塩田真三[50]，喜多見さき子[62]，昭和初期では，石田はる子[77]，吉本千鶴[79]，中沢か寿め[82]，原田恵助[88]等がいる。石田，吉村などが指摘するように，この頃から，割出法を主張する人達が増加して来た。それに対し中沢は，「裁縫学習指導法」[82]（1933年）で，寸法について「洋裁が次第に一般化して来る様になってから，割出が有用となり，従って，これを和裁にも適用しようと考える者もあるようになって来た」[82]と評し，つぎのように述べている。

「元来和裁は，標準寸法が凡てを支配してゐた。どんな人の着物も，あの標準寸法そのままを使用するわけにはゆかないが，然し，あの寸法を年令により，又体格によって，多少の融通をつけて行ったならば，標準寸法も，あながち捨てたものでもない。ただあの標準寸法をどの程度まで生かして使ってゆくことが出来るかが問題だけである。従って標準寸法はそれを十分生かして使ってゆける者にとっては，一々胸囲の何分の幾つ等と云って割出すよりは，遙かに迅速の方法である。また，標準寸法を生かすが為の割出ならば，非常に有意義のものであり，大いに奨励すべきものであると思ふ。しかし割出の中には，割出のための割出と云ふのがある。それは洋裁に割出があるから，和裁もそれに統一しなければならないものゝ様に考へて，従来の標準寸法をただ煩雑な計算を以て，置換へてみたに過ぎないと云ふ程度のものである。これでは，仕立上寸法を，標準寸法以上に複雑にしたと云ふより外はない。元来割出と云ふものは，私は一つの便法であると解釈してゐる。徒らに煩雑にしただけでは何の意義も認められない。

又，割出提唱者の中には，従来の標準寸法は，体格とか，調和統一とか云ふことが殆ど考慮されてゐないから，此の点を根本的に改めてゆかうと考へてゐる者もある。割出と云ってもそれ自身が絶対のものではない。或人が或一つの割出によって寸法を作ったとしても，その作られた寸法が，その人にとって十分のものではあり得ない。その人に実際合せてみて訂正してゆかなければ，その人の寸法となることは出来ない。そうならなければその人に対して絶対の価値を持った寸法ではな

い，故に結局標準寸法にしても割出にしても，そのものを生かして使ふこと，即ち如何に補正してゆくかと云ふことが大切である。」

すなわち，中沢は割出法を主張する人々に対して，個人の体型にあわせるための補正の必要を説いている。この手法は，今日の標準寸法によって，寸法を設定しようと主張する人々の理論的根拠となっている。

〔4.0〕 採寸及び割出による寸法設定

元禄時代すでに，身体の一部を採寸し，それを基準にして，着物の各部を割出していく方法が見られる。

飯島偉考氏は，風俗（日本風俗学会誌，昭和43年11月号）[101] の中で，「明治初期に於ける服装技術史上の和服と洋服裁断技術の接点」と題し，わが国裁縫書のうち，最も古いものといわれている「裁物秘伝抄」元禄３年（1690年）氏考著の相応裁の法の項を，次のように掲げている。

「仮令ば身何尺といふ共，此法を以て，このむ身長に懸ば各長巾と成。

身長に14をかくれば，ゑり長也。　　身長に155をかくれば，おくびひろきかたなり。

身長にを1125をかくれば，ゑり幅也。　　身長に775をかくれば，おくびせまきかたなり。

身長に9375をかくれば，おくび長也。　　身長に４をかくれば，袖のたけ也。

身はばも袖はばも同断，又身はばより袖はばのせまき有，相応にあらずといへども，其時の裁様に随って１分２分のひろきせまきもあしきと云にあらず，然共相応裁は是也，」と述べている。

これは，着丈を採寸して，それを基準とする比例割出法で，飯島も述べているように，服装技術史上注目すべき手法である。

これ以後，明治に至るまで，割出法を用いた著書は見当らないが，明治時代後期になると，これらの手法が用いられるようになってきた。

錦織竹香著「増訂普通裁縫教科書」[13]（1902年）によると，「衣類各部の寸尺は，男女，老若，肥瘦，長短，時の流行等に依りて，各異るものなり」[13]と述べている。同じ考えの人に喜多見佐喜子[27]渡辺きよ子[34]，武田太郎吉[26]等があって，それぞれ採寸の必要性を述べている。また，塩原千代子は，「塩原式裁縫書」[40]の中で，「衣服寸法の割出しに就ては，必ず解剖学上に立脚したる一定の基準を立てて，衣服各部の寸法を割出すにあらざれば，到底合理的のものにあらざるなり」[40]と述べ，さらに，「最も判断仕易き着物の後幅は何を以て標準となすか，人あり，余の後幅及び，衿肩明は何寸が適当ならんか，と云ふ質問を発したりとせんか，従来の方法にては，その答弁は容易に与へ得られざるべし，然るに原理的基準に拠るときは，立処に於て後幅は腰囲の３分１のにして，衿肩明は頸囲の４分の１を以て適度とすと，確然たる明答を与へ得るべし，故に，如何なる体格の人たりと雖も，この基準により適合せざることあらざるなり」[40]と，その寸法割出しの重要性を述べ，衣服寸法割出しに先き立ち，図３のような割出基準図を掲げている。

つぎに，この採寸および割出法による，各部の寸法設定の方法について，代表的なものを掲げるとつぎのようである。

1.　志摩野　司の方法[106]

（1）衿　幅　後身幅の10分の２以下

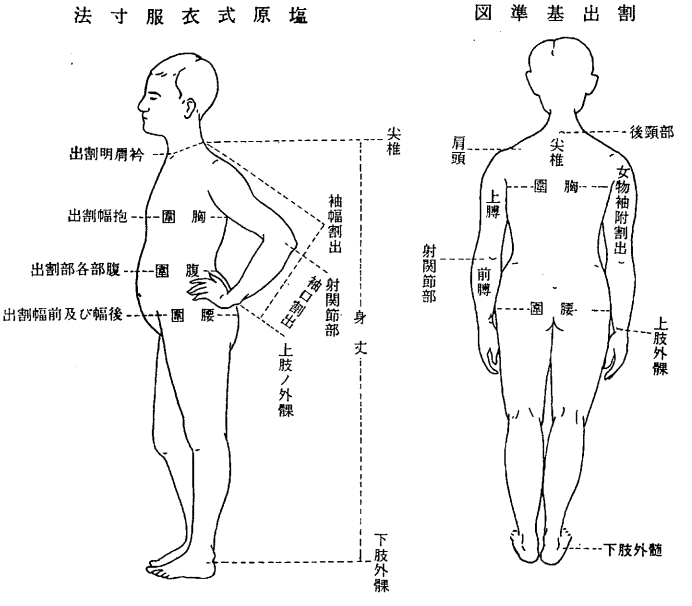
（2）衿肩明　後身幅の10分の３以下

（3）衿　下　男，着丈の２分の１以下
　　女，着丈の２分の１と２寸

（4）袖　付　男，着丈の100分の33
　　女，７厘に年令をかけて４寸６分を加ふ

（5）後身幅　腰囲りの10分の８の９分の４以下

図 3. 塩原式衣服寸法割出基準図



（6）前身幅　腰囲りの10分の8の9分の4以上
（7）衽　　腰囲りの10分の8の9分の2以上
（8）袖　口　男，着丈の5分の1内外
　　女，着丈の5分の1以下
（9）衽の傾斜（上下の幅の差）1寸につき3厘

この寸法率は，年令，男女の区別等により割出した寸法率で，各地方の着物を研究して，最も着心地のよい，最も形態のよい，平均率を採ったものである，と述べている。

2. 塩原千代子の方法[40]

（1）身　丈　脊椎の上部にある尖椎より，下肢の外髁までを度り，着丈の寸法に，5分乃至1寸を加ふ。この加寸は帯を締むる為の縮まり代及び，長きを好むもの短かきを好むものとに依りて異る。
（2）肩　衿　着丈の2分の1
（3）袖　幅　肩衿の2分の1に3分を加ふ
（4）袖　附　仕立上げ身丈の3分の1より5分を減ず
（5）袖　口　男物は，前膊の長さに，5分乃至，1寸を加へ，女物は，前膊の長さと同寸
（6）後　幅　腰囲の3分の1
（7）前　幅　後幅より約1寸を減ず
（8）抱　幅　腰囲の4分の1に3分乃至5分を加ふ
（9）衿肩明　頸囲の4分の1
（10）衽下り　衿肩明の2倍に5分乃至1寸を加ふ
（11）衽　幅　前幅の5分の3，若しくは，これに2分乃至3分を加ふ
（12）衿　幅　衽幅の5分の2
（13）衿　下　男物は身丈の2分の1より，1寸を減じ，女物は身丈の2分の1

と掲げている。

3. 小林れい・丸山ちよの方法[52]

（1）着　丈　身長の$\frac{8.5}{10}$

（2）袖　丈　振袖，着丈の$\frac{6}{10}$以上$\frac{8}{10}$迄

並袖，20歳前後は着丈の$\frac{5}{10}$

女並は$\frac{4.5}{10}$

元禄袖，着丈の$\frac{3.5}{10}$

男物，着丈の$\frac{4}{10}$

（3）肩　幅　着丈の$\frac{1}{4}$より2糎減ず

（4）後　幅　肩幅より2糎減ず

（5）前　幅　肩幅の$\frac{3}{4}$

（6）衿明肩　後幅の$\frac{1}{3}$－男物は8糎減ず

（7）衽下り　衿肩明の2.5倍

（8）衿　下　着丈の$\frac{1}{2}$

（9）衿　幅　後幅の$\frac{1}{5}$（紵衿）

（10）裄　　着丈の$\frac{1}{2}$より2糎減ず

（11）袖　幅　肩幅に2糎加ふ

（12）袖　附　衿肩明の2.6倍（女）

（13）袖　口　袖附より2糎減ず

と述べている。

従来，採寸，割出し等は，和服裁縫には不要と思われていたものが，洋服裁縫の一般化にともない，個人の体型の千差万別なることに注目し，次第に採寸，割出し法が和服にも導入されるようになって来た。しかし，初期においては，いまだ確固たるものではなかったようであるが，昭和に入り，種々の方法がこころみられるようになり，採寸か所，割出し方も明瞭になってきている。まず，はじめに，木下竹次がいる。

4. 木下竹次の方法[76]

木下は，その著「最新裁縫教科書上巻」[76]（1929年）の中で，寸法の割出しについて，「洋服の使用が盛になると共に，和服寸法割出と云ふことが称えられるようになった。和服は身体の大小を問はず，1反の布を用ひて全部直線に裁ち，曲線の人体を都合よく掩ふ様に縫合せてある」。従って，幅，丈に多くのゆとりが入れてあり，各部の割出の困難なこともここにある」とその困難さを述べ，割出しについては，つぎのように記している。

（1）身　丈　着丈＋25～30cm（端折分）

但し，着丈は第1胸椎の附根から足のくるぶしまで

（2）袖　附　着丈×$\frac{1}{16}$

（3）衿　下　着丈－(背丈＋20～25cm)

背丈は頸の附根から腰の最も細い処まで

（4）袖　丈　着丈×$\frac{1}{2}$より稍短かく

（5）裄　　裄の長さ

（6）後　幅　(胸囲＋6cm)×$\frac{1}{3}$　　6cmは弛み

（7）前　幅　(胸囲＋6cm)×$\frac{1}{4}$＋2～3cm

（8）衽　幅　後幅×$\frac{1}{2}$

（9）衿肩明　頸廻×$\frac{1}{4}$　　但し，頸廻は弛めに測る

（10）衽　　袖附－2cm，又は袖附と同寸法

5. 米沢　光の方法[84]

米沢　光編による，「裁縫精義」(1933年）では，採寸か所と採寸法として

（1）着　丈　尖椎より外踝まで
（2）裄　　背椎より手頸まで（側挙手）
（3）頸　廻　頸の下底（尖椎を起点として）
（4）腰　囲　襦袢の上よりゆるく
（5）掌　囲　五指を揃え最も広き部

と，記し，採寸か所をあきらかにしている。つぎに，寸法設定方法として

（1）着　丈　着丈の約$\frac{1}{2}$　年令によって斟酌する
（2）袖　口　掌囲にゆるみ2～3cmを加える
（3）袖・附　袖口と同寸又は2～3cmを加える
（4）袖　幅　ゆきの$\frac{1}{2}$に1cm内外を加える
（5）身　丈　着丈にゆるみ及び端折として25～30cmを加える
（6）繰　越　1～2cm
（7）裄　　取寸の通り
（8）衿肩明　頸廻の$\frac{1}{4}$
（9）身八ツ口　12～15cm
（10）後　幅　腰囲の$\frac{1}{3}$
（11）前　幅　後幅にゆるみ10cmを加えてその$\frac{3}{5}$強
（12）衽下り　着丈の$\frac{1}{5}$より2～3cm減ずる
（13）衿　下　着丈の約$\frac{2}{3}$
（14）衽　幅　前幅の$\frac{2}{5}$弱
（15）合褄幅　衽幅より1.5cmを減ずる
（16）衿　幅　頸の$\frac{1}{6}$弱

6. 石田はるの方法[106]

日本放送協会編「和服裁縫」(1936年）で，つぎのように述べている。

（1）身　丈　大体身長位がよい，さうすると端折の分量が丁度よい。
（2）裄　　手を垂れて，背より手のクルブシ位迄
（3）袖　丈　若い人は，着丈の$\frac{1}{2}$から，身長の$\frac{1}{2}$位
　　中年位は，身長の$\frac{2}{5}$位
　　老人は凡そ，身長の$\frac{1}{3}$
（4）袖幅と肩幅，凡そ身長の$\frac{1}{2}$

と，述べている，袖幅と肩幅とは，裄のことであろおか？　また，身幅についてはあきらかにされ

ていない。

7. 岡本すみ子の方法[97]

その著,「精詳衣服新教本和服篇」(1939年) で，次のように述べている。

(1) 袖　丈　身長，年令に応じ，着て形のよい長さに定める。長い袖は晴着に，平常着には短い方がよい。

(2) 身　丈　肩山から足首までの着丈に，端折の長さとして，20～28cm加へた長さが適当である。

(3) 裄　背から，水平に上げた手の手首までの長さ

(4) 衿　下　裾から腰骨までである。腰紐より3cm位下った位置がよい。

(5) 身　幅　腰の最も太い所の周囲を計る。

$$後身幅=\frac{腰囲}{3},\quad 前幅=\frac{腰囲}{4},\quad 衽幅=\frac{腰囲}{6}$$

(6) 肩　幅　後幅＋2cm，2cmより多く拡げると，袖が落過ぎた形になる。

(7) 袖　幅　裄－肩幅

(8) 繰　越　衣服の肩山は，体の肩山に正しく合はねばならない。普通に衿を頸に附けて着るならば，衿は肩山より衿肩縫代1cmだけ後に附くので，丁度合ふのである。しかし，抜衣紋に着る人は，衿肩を後へ2～4cm繰越，繰越寸法を正しく定めるには，肩の頂上から後衿附までを計る‘と述べている。

〔5.0〕 結　　論

和服寸法の設定に当り，古くはどのようにして定められたものか遂にあきらかにできなかったが，伊島[101]及び，牛込[102]が指摘するように，裁縫の伝承方法が，口伝により秘伝として，その技術を公開しなかったところに大きな原因があるものと思われる。また，牛込の指摘のように，当時の裁縫書は，男性によって執筆されたもので，これは当時の女子教育の低さを物語るものといえる。「裁縫は衣食住の第一なり」といわれながらも，それを自らの手で，次の世代へ残そうとする意欲に欠けていたのではなかろうか。そのようなことから，折角の裁縫書も，技術の一部を公開するにとどまった。

また，和服の形そのものが単純で，平面的なものであり，丈，幅ともに多くのゆるみが入れられているため，その寸法が少々どうであっても，着られないということはない，というところにも，大きな問題点があったのであろう。

明治に入り，学校教育の中で，裁縫が取り扱われるようになって来ると，一斉教授で要求されるのは，仕立上げ寸法である。そこで，従来の経験により，多くの人達に用いられてきた寸法を積重ねたものが，普通寸法として用いられるようになり，これが今日の標準寸法の基礎になったのである。

その標準寸法を基準に，中沢らは，体型によって，寸法の増減をはかり，個々の体型に合せようとする手法を用い，その考え方は今日まで受け継がれている。

一方，岡本政子[17]らは，洋裁技術の導入により，個人の体型に合わせて，各部を採寸し，製作仕様とする傾向が，明治後期に現れてきた。しかし，初期のものには，中沢の指摘するように，割出しのための割出しというようなものもあり，また，洋裁に採寸，割出しがあるから，和裁にもというようなものもあった。しかし，和服と洋服では，その形態が根本的に異るものであるから，おのずか

ら，その採寸，割出し方法も異るものでなければならない。その際，もっともやっかいな点は，木下の指摘する，幅，丈に多くのゆるみを入れなければならないことである。また，形はどのような着装をこころみようとも，すべて同じ形であり，着装の際，目的により加減して身に纏うため，同一人であっても，その着装の仕方によっては，同じ寸法では間に合わぬこともある。

このようなことから，現在もなお，和服寸法設定法の基本的規準は確立されてはいない。

今後の和服寸法は，人間工学的視点から，体型の立体的測定はもちろんのこと，着装といった要因も充分考慮した上で，設定されなければならない。

終りにのぞみ，本論文の校閲を賜った松井和哥本学教授，島田俊秀助教授に対し深く感謝致します。

引用・参考文献

1）正木政幹：絹布裁要　林宗兵衛板（1764）
2）上原素白：裁縫早手引　万笈堂英平吉板(1803)
3）不詳：裁物早指南　吉田屋文三郎板（1850）
4）不詳：裁縫早学門（全）西徳堂板（1851）
5）不詳：裁物早指南　英文蔵板（1856）
6）上原素白：裁縫早手引　金花堂須原屋佐助板（1864）
7）近藤寿和編：裁縫指掌上三巻　（1879）
8）渡辺辰五郎：普通裁縫教授書（巻二）（1880）
9）中尾宗七：普通裁縫書（巻上）（1883）
10）渡辺辰五郎：裁縫教科書（巻の2）東京裁縫女学校（1897）
11）藤野和歌子：和服裁縫の栞　魚住書店（1900）
12）吉井貞子，吉国治子：小学校教授用裁縫書（上巻）吉岡書店（1901）
13）錦織竹香：増訂普通裁縫教科書　国文館(1902)
14）谷田部順子，小谷野千代子：高等小学校裁縫教科書　目黒書房成美堂（1903）
15）谷田部順子：裁縫教科書（上巻）成美堂(1903)
16）谷田部順子，小谷野千代子：高等小学校裁縫教科書（教師用下）成美堂（1904）
17）岡本政子：実用裁縫自在　大学館（1904）
18）岩瀬松子：和服裁縫道しるべ下巻　松陽堂光世館（1904）
19）前田とみ子．宮川ちい子：裁縫新教科書　自省堂（1905）
20）椙山正弌：新令適用小学校裁縫科教案及教方　東京裁縫教授法研究会　（1909）
21）錦織竹香：最新裁縫教科書（上巻）宝文館（1910）
22）渡辺滋：普通裁縫教科書　私立東京裁縫女学校出版部（1912）
23）神田順子：裁縫新教授書（上）大倉書店（1912）
24）渡辺きよ子：和服裁縫独まなび　春江堂（1912）
25）山口県立山口高等女学校：普通裁縫口授書（上巻）
26）武田太郎吉：裁縫の極意　明治出版社（1914）
27）喜多見佐喜子：裁縫指南　博文館（1914）
28）山下源之助編：裁方一斑　三越呉服店（1914）
29）楓女史，小畑たか子編：家庭裁縫の栞　岡田文祥堂（1916）
30）文部省：高等小学校裁縫教授書（1916）
31）篠田塩子編：裁縫おしへ草　一書堂（1916）
32）栗原季子，大和花子：和洋独まなび　精華堂（1916）
33）吉田房子：裁縫の要訳　石英堂（1916）
34）渡辺きよ子：新編和服裁縫教授書　春江堂（1917）
35）奈良女高師校長尾糸：裁縫教科書（上巻）修文館（1919）
36）寺田五三子：家庭裁縫全書　盛林堂（1919）
37）東京裁縫女学校長：裁縫全書単衣の部　東京裁縫女学校出版部（1921）
38）東京裁縫研究会：裁縫案内　芳文堂（1921）
39）吉田調子：日用百科全書第七編裁縫と編物　博文館（1922）
40）塩原千代子：塩原式裁縫書　文泉社（1923）
41）佐伯ハマ子，渡辺芳苗：裁縫急所　アルス（1923）
42）広島県立広島高等女学校裁縫研究会：裁縫備忘録　広島高等女学校（1923）

43）東京女高師成田順：高等小学校高等女学校　初年級裁縫教材と指導法　南行社（1924）
44）東京女高師高橋イネ：裁縫筆記録　文書堂（1924）
45）飯塚マツヨ：メートル法新裁縫書　大倉書店（1924）
46）財団法人女子美術学校裁縫研究会：メートル法高等裁縫書（第1巻）（1924）
47）尾崎芳太郎：新しい和服の裁縫（1925）
48）渡辺滋：中等教育新裁縫教科書（前編）　東京裁縫女学校出版部（1924）
49）渡辺滋：中等教育新裁縫教科書　東京裁縫女学校出版部（1924）
50）小岩井規太郎，塩田真三：実用裁縫全書　博文館（1925）
51）奈良女高師伊藤英子：裁縫新教科書　集成堂（1925）
52）小林れい，丸山ちよ：メートル法裁縫教科書（上巻）三友堂（1925）
53）高山貞子：裁縫の知識　崇文堂（1925）
54）田村てう：メートル法使用新裁縫書　宝文館（1925）
55）岸田興一：裁縫教本（上巻）神奈川高女学友会（1925）
56）戸板関子：実用新式戸板裁縫全書　広文堂（1926）
57）東京女専吉村千鶴：現代裁縫教科書（一巻）東京開成館（1926）
58）武田裁縫書（上巻）（1926）
59）成田順：中等教育裁縫教科書　大成書院(1926)
60）岩国女子技芸学校裁縫教科書（前編）：(1926)
61）武田太郎：家庭実用武田裁縫書（上巻）富山房（1926）
62）喜多見さき子：嫁入文庫第二編裁縫の巻　実業の日本社（1926）
63）県立佐賀高等女子校裁縫研究会：裁縫新教本（和服の部）関西書院（1926）
64）中川とら，佐藤松野：高等女子校用メートル法適用新編裁縫教科書（一巻）大日本図書(1926)
65）渡辺女子校出版部代表渡辺滋：渡辺裁縫新書（上巻）渡辺女学校出版部（1926）
66）福田梅子：家庭実用裁縫案内　島鮮堂（1926）
67）大妻コタカ：模範裁縫教科書（一巻）三省堂（1926）
68）成田順，松井よし：女学生の和服裁縫　文洋社（1927）
69）家庭裁縫学研究会：家庭裁縫独学（1927）
70）大阪府立清水谷高女結城親学：中等和洋裁縫教科参考　文祥堂（1927）
71）岩田英子：和服裁縫参考書　金洋堂（1927）
72）大妻コタカ：和洋裁縫講義　大興社（1927）
73）東条武子：家庭裁縫の栞　日吉堂（1927）
74）三松八千代：更新裁縫教科書（用具無し実用的縫い方）目黒書店（1928）
75）東京女専東京裁縫女学校渡辺滋：専門教育裁縫全書単衣の部　渡辺女学校出版部（1928）
76）木下竹次：最新裁縫教科書（上巻）目黒書店（1929）
77）石田はる子：嫁入文庫和服裁縫編　実業の日本社（1929）
78）文部省：尋常小学裁縫新教授書　大日本図書（1932）
79）吉村千鶴：現代裁縫教科書（1巻）東京開成館（1932）
80）神谷ユキヘ：家事裁縫手芸講座　玄海堂(1931)
81）石田はる：和服裁縫系統的精説（上巻）(1932)
82）奈良女高師中沢か寿め：裁縫学習指導法　東洋図書（1933）
83）大妻技芸学校大妻高等女学校裁縫研究会：新撰裁縫教科書（1巻）三省堂（1933）
84）奈良女子高等師範学校裁縫研究会：裁縫精義　東洋図書（1933）
85）東京都小学校裁縫研究会：新訂裁縫学習帳（高等2学年）青野文魁堂（1934）
86）今村品子：図解でわかる初歩より奥儀最新和服裁縫と着附盛林堂（1934）
87）松村豊，今村品子：新々裁縫教科書Ⅰ　成林堂（1934）
88）原田恵助：新編日常和服裁縫の秘訣　婦女界社（1935）
89）仙台教育会：裁縫学習帳第1学年（1935）
90）小樽高等女学校：たちぬひのしをり（1936）
91）渡辺女学校東京女子専門学校裁縫研究会：中等学校用裁縫要義（上巻）渡辺女学校出版部（1937）
92）社会教育協会：家事裁縫学習書（雪の巻）社会

教育会（1938）
93）福井県鯖江女子師範学校裁縫研究会：郷土に即せる裁縫学習帳尋常科第6学年用（1938）
94）三重県教育会：新制家事及裁縫教科書（下巻）日本青年教育会出版部（1938）
95）青芳とみ子：和服裁縫及時間教授の実際　婦人の友社（1939）
96）高山春子：図解和服裁縫百科全書　大洋社出版部（1939）
97）岡本すみ：精詳衣服新教本和服篇　東京開成館（1939）
98）渡辺女学校東京女子専門学校裁縫研究会：専門学校用裁縫要義(上巻)渡辺女学校出版部(1940)
99）東洋家政女学校：裁縫大要奥付　明治の家庭社（1941）
100）東京女高師石田はる：新修和服裁縫要訳　三集社出版部（1946）
101）飯島偉考：風俗（日本風俗史学会誌）（1968）
102）牛込ちゑ：被服教育の変遷と発達　家政教育社（1971）
103）久保田染山：女学生裁縫教授書（1878）
104）高橋貴四郎：新編裁縫学全書　女子技芸教育会（1911）
105）石田はる：和服裁縫　日本放送協会編（1936）
106）志摩野司：新式和服裁縫　精美堂（1913）